

14 春 きさやえんどうにおける

ナモグリバエの発消長と防除法

被害がとくに重要視される時期は、6月中～下旬における第2世代とみられ、幼虫の発生は、5～6月が低温に経過した場合に多発するとみられる。茎葉散布による防除適期は、幼虫による被害発生初期とする。（第2世代観察として、主茎の最上位から数えて3～4枚目の葉を観察する）

(1) 背景とねらい

県北や沿岸部の地域を中心にきさやえんどうの栽培が普及しているが、栽培が始められた当初から、ナモグリバエによる被害が問題視された。とくに多発した場合には葉の被害のほか、がくにも潜入するため、外観が損われ品質低下が著しい。ところが、本種に関する生態的知見が乏しく、防除法について確立されていなかったことから、要望課題として二戸普及所から提出され、試験した結果一応の成果が得られたので参考に供する。

(2) 技術の内容

1) 発消長

4月から7月中旬までの間に成虫は3回出現する。一般に、発生密度が高まり、被害がよくに重要視される時期は6月中～下旬における第2世代とみなされる。

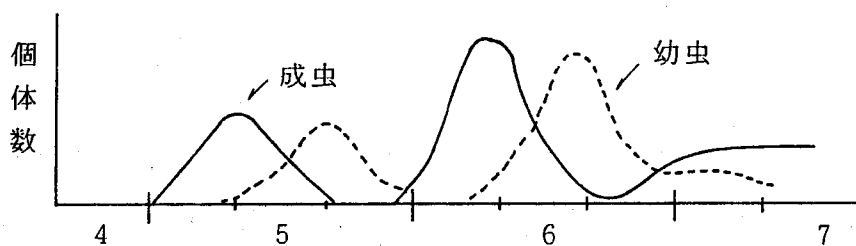


図-1 成虫および幼虫の発消長（模式図）

2) 防除法

(ア) 第1世代防除のための播種時にエチルチオメトン粒剤を作条3kg/10aを施用する。

この処理をしなかった場合は、第1回成虫発生盛期（幼虫発生初期）にあたる5月上～中旬ダイアジノン乳剤、または、スミチオン乳剤1,000倍液を散布する。

(イ) 第2世代防除のため、第2回めの成虫発生盛期（第2世代幼虫発生初期）にあたる6月上～中旬にダイアジノン乳剤1,000倍液を散布する。

(3) 指導上の留意事項

1) 幼虫期間（5月中～下旬および6中～7月上旬）に高温に遭遇すると著しく死亡率が高まる。ことが観察されているので本種の発生は5～6月が低温に経過した場合に多発すると思われる。

2) エチルチオメトン粒剤の土壌施用は、生育初期のアブラムシ類の防除も兼る。なお、生育初期に軽い葉害（葉に褐点がみられる）が生ずることがあるが、その後の生育にはほとんど影響がない。

3) 茎葉散布による防除適期の目安は、幼虫による被害発生初期とする。この際、第1世代は問題がないが、第2世代の場合は主茎の最上位から数えて3~4枚目の葉を観察すること。

4) 第2世代の発生が著しく多い場合は、幼虫発生初期の散布1週間~10日後にさらに1回の散布を追加する必要がある。

(4) 当該事項にかかる試験研究課題名

7. 野菜の病害虫防除

1. 主要病害虫の生態と防除

3. ナモグリバエ 昭和54~57年

(5) 参考文献資料

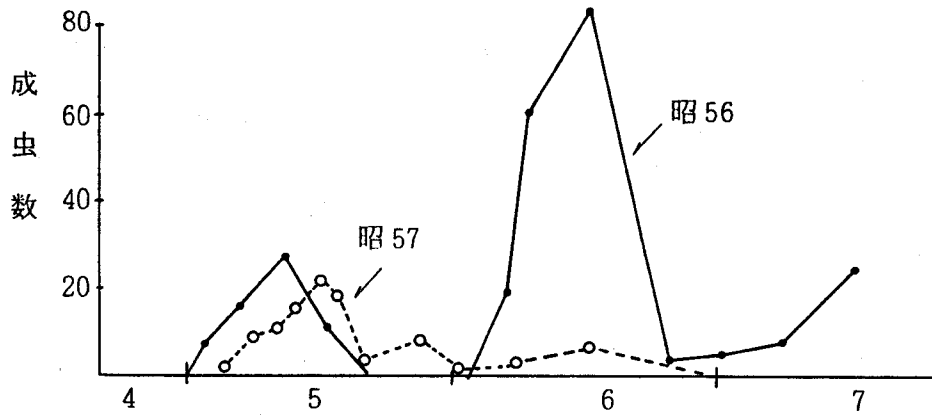
岩手県園芸試験場 : 昭和54年度 園芸作物害虫に関する試験成績書
 " : 55 "
 " : 56 園芸作物の病害虫 "
 " : 57 "

(6) 試験成績の概要

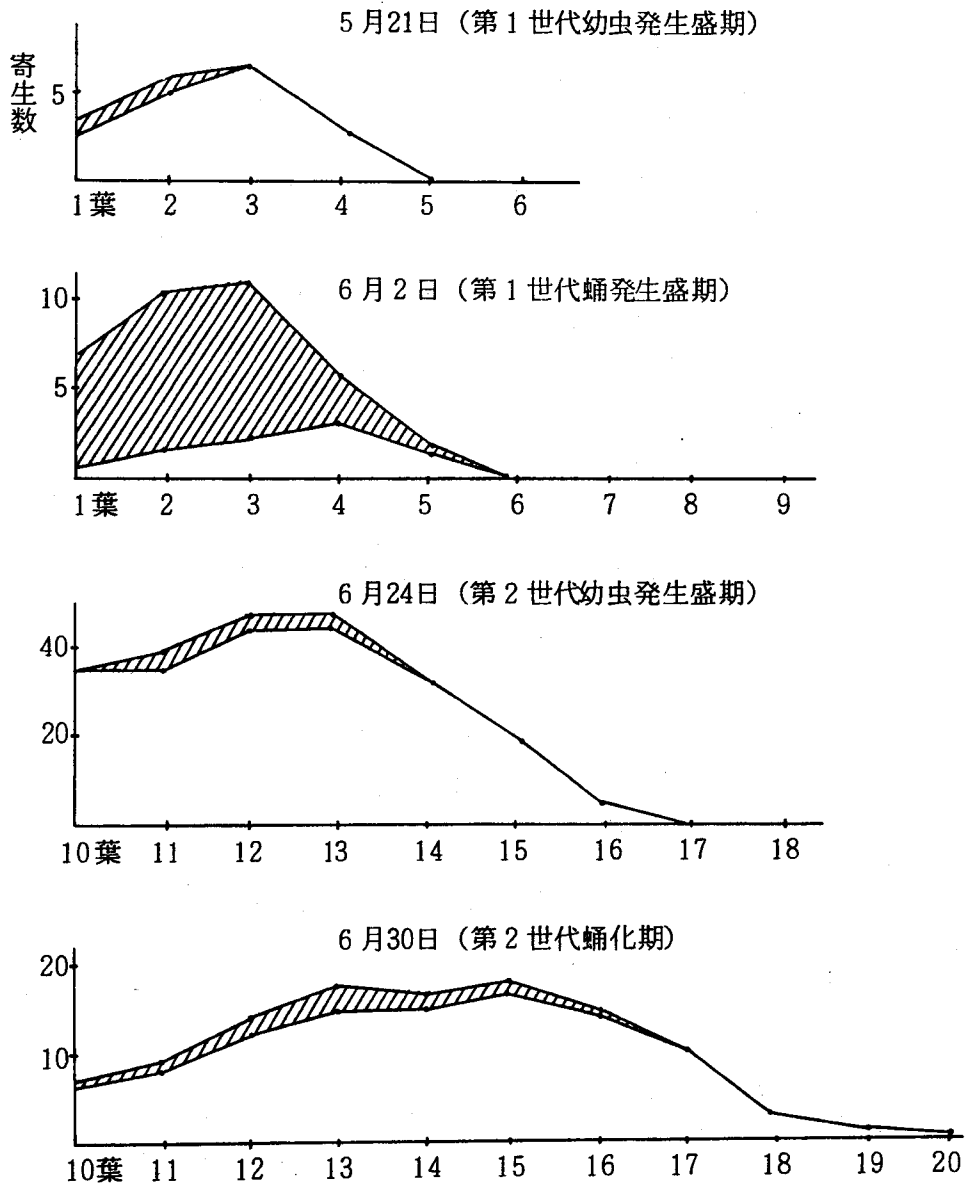
1) 生態に関する試験

表-1 成虫、幼虫および蛹の発生活消長(昭56)

調査月日	成虫数	葉数	1茎当り寄生数			羽化数	備考
			幼虫	蛹	計		
4. 28	0	-	0	0	0	0	10個体全葉調査
5. 2	7	-	0	0	0	0	
6	15	-	0	0	0	0	
11	27	3.5	5.3	0	5.3	0	
16	10	4.9	15.6	0	15.6	0	
21	0	5.6	17.4	0.8	18.2	0	
27	0	7.0	15.9	20.1	36.0	0	
6. 2	0	9.0	11.1	26.9	38.0	0	
6	19	-	-	-	-	0	
8	60	11.3	11.9	13.9	25.8	7.2	
15	83	14.8	11.8	0	11.8	-	} 第10位葉以上調査
24	3	17.3	230.5	3.6	234.1	-	
30	5	20.0	104.8	8.8	113.6	-	
7. 8	8	-	40.8	5.6	46.4	-	} 上位10葉調査
15	25	-	51.8	10.2	62.0	-	



図一2 成虫発生消長 (昭56~57)



図一3 葉位別寄生数 (昭56)

※
表-2 上位葉における葉位別幼虫、蛹の寄生葉率(%) (昭56)

葉位 月日	- 3	- 2	- 1	0
5 月 11 日	-	80	40	0
16	100	90	40	0
21	100	100	20	0
27	100	90	0	0
6 月 2 日	30	0	0	0
6	0	0	0	0
15	90	50	0	0
24	100	63	13	0
30	100	80	40	0

※最上位の展開葉を0とし、上から順に-1、-2…とした。